

てきすぽどーじん第4号 レビュー

ohtomo

タイトルから察せられるとおり、学校でのいじめのおはなし。冒頭、主人公は父親から学校でいじめをしているということでしかられる。主人公は父親に反発しながらも自分がいじめをしているという事実そのものは否定しない。

この作品を読んで、ある若い親が自分の子供がいじめられているくらいなら、いじめをしている方がまだいいといていたのをふと思い出した。

この作品は、半一人称と呼べるような視点で描かれている。主人公は小学六年生の男子であることから採用された言葉と、三人称の地の文がフラットに続く文章に著者の持ち味を感じた。

これからも著者の個性を生かした作品を望む。

コールドスリープSFもの。と聞けば誰もが思い浮かべずにはいられない冷たい方程式であるが、本作は注意深く冷たい方程式との距離を保っている。

主人公達は、最新の恒星間移民船に乗っている。移民船は(主人公にとっては) 詳細不明なトラブルに見舞われ、当初に十年だった目的地への所要時間は百二十年にまで延びている。

主人公とヒロインはコールドスリープから目覚め、船内の食堂で徒然に話している、というのは本作の内容である。この作品を読んで改めて感じるには、人間には物語が必要であるということだ。

主人公は謎めいたヒロインに翻弄されているようで、その実紛れもなくこの小説の主人公として特権的な位置に座している。

不思議なタイトルと同じように、不思議な読書体験を与えてくれる作品。

いつの日にか三人称日記失楽篇、復楽篇、出家篇と続きが出るのではないかとおののいてしまった。

通常であれば一人称で書かれる日記対を三人称で書く。そこにフィクションの入り込む間隙が生まれる。

田だ、作者について何のイメージも持っていない読者がこの作品を読んだときにどのような印象を持つかはわからない。

インターネット、ソーシャルメディアの発達によって誰もが私的な文章を世界に公開できるようになった現代だからこそ成った作品であったように思う。

どうしようもない腑抜け男が、しゃべる一万円札ユキチさんと出会い再起する話。

冒頭のATMのシーンがラストシーンの布石と成っている。

主人公の男性にはかなり苛々させられたが、それも作者の丁寧な描写故だろう。

主人公の男性は、しゃべる一万円札ユキチさんとの交流を通して、自分から別れを切り出した恋人と復縁し、休止状態だった就職活動を再開する。

わたしの普段読むものとは全く傾向が違っていて、この作品にたいするこの文章はなんだか雲をつかむような調子になってしまった。

人間の形をした腎臓生物の物語。

通常の間と違ふ生まれをしているが、主人公とその兄弟達（幼体時は無性で、二十六体が計画的に生産される）、そして親的な立場の存在による家族小説と呼べるだろう。

ラストシーンで、主人公があるキャラクターを殺害する。無力な存在をあやめるなら、もっと苦痛が少なく一瞬で絶命させる方が主人公の心情に似つかわしいのではないかと感じた。

あるいは、非常な苦痛を与えることを知っていて、それでも自分はそうしたいのだという欲求を抑えることができなかつたのだとしたら、主人公の業の深さを感じずにはいられない。

文中では語られず、読み手に託された深いところに横たわる恐ろしさ、凄みを感じた一篇。

人と人、人と物語の間に働く重力的なものについての小説。

パブ版ではカラーラストも楽しめる。

主人公が海を見に行くシーンは、なぜか妙に共感してしまう。冬の海は人を引きつける独特な魅力を持っているのかもしれない。

主人公は知人達とルームシェアしつつ、互いに不必要な干渉はしないというルールの下に日々を送っている。一つ屋根の下で、互いに干渉しない距離感を保ち続けるというのは、気楽なようでいて、共同生活を送る全員が同じ美意識を持っていなければすぐに甘ったるい家族ごっこに堕する。

冬の海、主人公の見る夢とも幻ともつかない風景、ブドウの実の中を泳ぐクジラ。

それらのシーンから立ち上る浮遊感と、奥底にあるぴんと張った糸のようなものは、作者の持つ独特な感性によって生み出されたものであると思う。

てきすぽどーじん第4号レビュー

<http://p.booklog.jp/book/41868>

著者 : ohtomo

(てきすぽどーじんに載せていただいた拙作については省略させていただきました)

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/ohtomo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/41868>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/41868>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.